

短 報

コロナ禍における看護実習室の自己学習支援の在り方

緒方 優¹⁾ 榊 美樹¹⁾ 賀数 勝太¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 中田 諭¹⁾
 馬場 香里¹⁾ 松本 文奈¹⁾ 大原まどか²⁾ 森島久美子²⁾

The Ideal Way of Self-Learning in a Nursing Training Room during
the COVID-19 Pandemic

Yu OGATA¹⁾ Miki SAKAKI¹⁾ Shota KAKAZU¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Satoshi NAKATA¹⁾
 Kaori BABA¹⁾ Ayana MATSUMOTO¹⁾ Madoka OHARA²⁾ Kumiko MORISHIMA²⁾

〔Abstract〕

The Faculty of Nursing at St. Luke's International University has a system wherein a full-time assistant provides self-learning support in the training room, thereby encouraging undergraduate students to learn independently. Since 2014, we have been conducting a questionnaire survey to improve the training room, and using its results for the operation of the room since the subsequent year. Before the spread of coronavirus disease 2019 (COVID-19), the room was open all day. However, to aid infection control, there are now restrictions in terms of the number of students allowed in the room at a time and the duration for which they can use it. Therefore, we predicted that the student evaluation would change significantly this year compared with the previous years. The results of this year's questionnaire, however, showed no major change, and 70% of the students were highly satisfied with the training room. Thus, the restrictions do not affect the students' satisfaction level with the room. Nevertheless, the students who were not satisfied pointed out the dearth of resources and practice time. This paper suggests future measures for improving the training room in the context of COVID-19.

〔Key words〕 Self-learning support, COVID-19 pandemic, Independent learning, Nursing students

〔要 旨〕

聖路加国際大学看護学部では、専任の実習室助手が実習室での自己学習支援を行う体制を取り、学部生の主体的な自己学習支援を促している。2014年から実習室改善を目的としたアンケート調査を行い、次年度以降の実習室運営に生かしている。新型コロナウイルス感染症拡大前は、終日実習室を開放していたが、今年度は感染対策のため人数や時間を制限したことで、学生の評価は例年と比べ大きく変化することが予測された。

今年度の実習室アンケート結果より、実習室を終日開放していたこれまでと大きな変化はなく、7割の学生より実習室に対する高い満足度を得られ、実習室の利用時間や人数制限を設けた運営方法が実習室満足度に影響を与えにくいということが明らかとなった。しかしながら、満足度を得られなかった学生からは、物品不足や練習時間不足に関する回答も得られており、コロナ禍の実習室における今後の課題も明確となった。

〔キーワード〕 自己学習支援, コロナ禍, 主体的学習

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
 2) 聖路加国際大学総務部・St. Luke's International University, General Affairs and Administration

I. はじめに

近年、患者の権利擁護が重視され、看護学生が臨床実習を通して看護技術を実践する機会は少なくなっている。また、厚生労働省の報告によると、「臨地実習では、実際に対象者の看護を行うことよりも看護過程の展開におけるプロセスに重きを置いて指導することが多く、技術等を実践する機会が減少している場面も見受けられる。」¹⁾と示されていることから、看護学生が看護技術を実際に提供するという行為はとても貴重なものとなっている。更に、新型コロナウイルス感染症が拡大したことで、臨床実習の機会は感染症拡大前に比べ大幅に減少し、これまでにない危機に直面している。この状況は、看護学生が将来看護師として働く際、看護技術の経験不足という点で大きな影響を及ぼす可能性がある。

「看護技術の習得には、反復練習が不可欠であり、それにより技術の習熟度を高め、その積み重ねから更に複雑な技術へと積み上げが必要といわれている。」²⁾病棟実習の時間やそこでの経験が減少傾向にある現在、看護学生にとって学内での看護技術の習得は貴重な時間のひとつであるといえる。

聖路加国際大学看護学部では2014年6月から学部生の自己学習支援を強化するため実習室助手が配置された³⁾。新型コロナウイルス感染症拡大前は、実習室を終日開放することで、学生は自分の空き時間や放課後に実習室を利用し、看護技術習得のための自己学習を行っていた。しかしながら、昨年度より新型コロナウイルス感染症が拡大したことを受け、実習室も人数や練習時間に制限を設けた運営に変更せざるを得ない状況となった。

2021年度は大学の時間割に併せ、自己学習時間を設定し、学生は決められた時間に実習室で自己学習を実施する運営方法に変更した。看護技術の練習がメインとなる学部2年生を4つのグループに分け、1コマあたり25名の自己学習日を指定した。また、他学年も利用できるように、週4コマ分をフリーの自己学習として用意した。

本稿では、感染対策のために利用時間や人数を制限したことによる学生の学習への影響やコロナ禍の実習室における自己学習の在り方について検討する。

II. コロナ禍の自己学習の実施方法

2021年度の自己学習は感染症拡大防止のため、人数と練習時間を制限した方法で実施した。

看護技術を履修する学部2年生を対象に、2年生専用の自己学習時間を週4コマ設けた。ベッド数を考慮し1コマにつき、25名の定員を定め、1学年100名の2年生が週1コマは自己学習時間を確実に確保できるよう日程調整を行った。また、この他にも、様々な学年が練習でき

るようフリーの自己学習時間を平日週4コマ設け、実技試験前は土曜日も開放した。フリーの自己学習に関しては、事前予約なしで実習室を開放し、実習室の定員を超えた場合は、自己学習時間を見ながら人数調整を行う方法を取った。

III. 自己学習利用者数

2021年度前期（4月～6月）においては、利用者指定の自己学習日を44コマ、平日フリーの自己学習日を43コマ、土曜日終日フリーの自己学習日を3日設けた。

利用者指定日1コマあたりの平均利用者数は17人、フリー1コマあたりの平均利用者数は19人であった。

月ごとの利用者は4月が349名、5月が626名、6月が480名であった。

2019年度の実習室利用者数は4月が225名、5月が778名、6月が184名であったことから、前期全体の利用者数としては一昨年より今年度の方が多いことが明らかとなった。

IV. アンケート実施方法

2021年度は学部生460名を対象に、2021年6月9日～6月30日の期間で無記名のwebアンケート（Googleアンケートフォーム）を実施した。アンケートは、「実習室助手による支援の満足度」、「利用時間・利用頻度」、「実習室での自己学習の満足度」など全36項目（選択肢22問、自由記載14問）の質問を実施した。

〔実施上の配慮〕参加は自由とし、無記名で、個人が特定されないことについて提示し、聖路加国際大学事務部教務・学生課に調査実施届を提出し承認を得て実施した。

V. アンケート結果

119件（回収率25.9%）の回答数が得られた。実習室を最もよく利用する学部2年生の回答が全体の43%を占め、次いで学部3年生が18%、学部4年生が12%という結果であった。

感染対策のため、練習時間や人数を制限した実習室の自己学習について、学生の学習への影響が大きいと予測される、「実習室助手による支援の満足度」、「練習時間」、「実習室での自己学習に対する満足度とその理由」について過去のデータとの比較を行ったところ大きな変化は見受けられなかった。

1. 実習室助手による支援

「実習室助手による支援は行き届いていたと感じますか」という4択の質問に対し、全体の80%の学生より「そ

う思う」と回答が得られた。アンケートを開始した2014年の結果は「そう思う」と回答した学生が28.9%であり、その後は50%台を維持していた。2019年に71.2%となり、今年度の結果は80.7%であった。同質問に対し、「あまり思わない」「思わない」と回答した学生はおらず、上記の回答は0%であった（図1）。

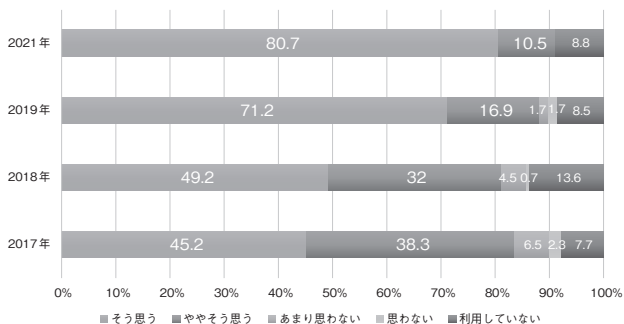


図1：実習室助手の支援に対する学生の回答（2017年～2021年）

2. 実習室の利用頻度

「1番多く学習した時期に、実習室を自己学習のために、どのくらいの頻度で利用しましたか」という5択の質問に対し、「2～3日に一度」と回答した学生が全体の44%であった。次いで、「ほとんど学習していない」の回答が19%、「1週間に一度」が14%、「毎日」が11%であった。

3. 実習室の自己学習の満足度

「実習室での自己学習は満足にできましたか」という質問に対し、全く満足ではないを「1」、とても満足しているを「10」として10段階で評価したところ、全体の27.7%の学生より「8」の回答が得られた。次いで、23.5%の学生が「10」と回答し、20.2%の学生より「9」という回答が得られた。

2019年度は、最も多く得られた回答が「8」で34.7%、次いで28.3%の学生が「10」と回答し、19.7%の学生より「9」という回答が得られた。過去4年間のデータより、毎年多少の変動はあるものの、満足度「8」～「10」が全体の約60%～80%を占めている（図2）。

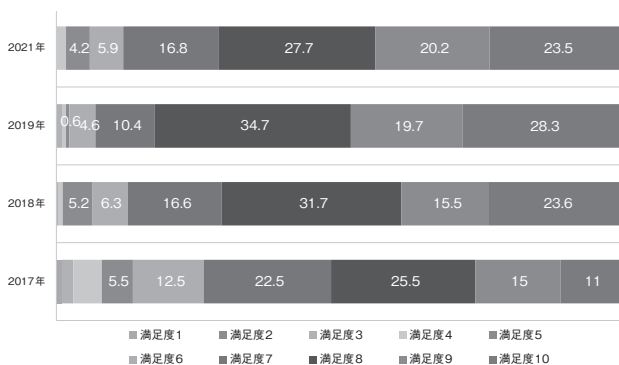


図2：自己学習の満足度に対する学生の回答（2017年～2021年）

4. 自己学習の満足度に対する自由記述

自己学習の満足度に対する自由記述を求めたところ、65件の回答が得られた。そのうち、41件が満足できた理由、18件が満足できなかった理由であった。他6件は利用したことがなく評価できないという回答であった。

満足できた理由として、練習環境に関する回答が24件、実習室助手やラーニングアシスタントによる支援に関する回答が8件、練習時間に関する回答が7件、利用者マナーに関する回答が2件であった。

満足できない理由としては、物品不足に関する回答が6件、時間制限に関する回答が5件であった。

2019年度は「物品不足」に関する回答が3件、「練習時間の制約」に関する回答が2件、「練習環境」に関する回答が1件という結果が得られている。

VI. 考 察

2021年度は感染対策のため、自己学習時間や人数の制限を設けたことで、学生にとっては例年に比べ自由度の低い実習室の利用となった。しかしながら、実習室を利用した学生のアンケート結果によると、多少の減少はあったものの実習室での自己学習に対する満足度は70%を占め、高い満足度を維持することができたのではないかと考える。また、実習室助手の支援の充実度に関しては、2019年度に比べ約10%も上昇していたことから、学生の自己学習支援を行う上で重要視するものとして練習時間の確保だけでなく、実習室助手の存在の必要性も挙げられるのではないかと考える。

1. 実習室助手による支援

アンケートを開始した2014年の実習室助手による支援の充実度について4択で問い、「そう思う」と回答した学生の割合は28.9%であったことから、年々実習室助手の支援の充実度が増加してきていることが明らかとなった。2019年度に満足だと感じていた学生は全体の71.2%であったことから、2021年度は2019年度より満足度が約10%上昇したことがわかった。また、同質問に対して、「あまり思わない」「思わない」と回答した学生はこれまで10%前後で推移していたが、今年度は0%であったことから、実習室助手の支援に対する充実度が高まっていると考えられる。

実習室助手による支援に関して、「声をかけてくれて安心した」「アールームに行きたくなる雰囲気だった」といった回答が得られており、実習室助手の存在が学生の精神的な支えに繋がっていたのではないかと考える。また、コロナ禍で対面授業からオンライン授業に変更となり、人との関わりが制限された中での自己学習は、看護技術の習得に限らず、学生の心理面への支援にも関係

していた可能性がある。

更に、人数を制限した自己学習は、実習室助手による各学生への個別的な支援に繋がり、学生と実習室助手との距離を縮め、双方の関係性を深める環境作りに貢献できたのではないかと考える。

2. 実習室の利用頻度

実習室の利用頻度については、2014年度のアンケート開始以来、結果に大きな変化はなく、全体の40%近くは「2～3日に一度」の練習頻度で推移していることから、学生の自己学習時間については学生の需要に応じた練習時間の確保の重要性が明らかとなった（図3）。今後も練習時間を制限した実習室の運営が必要となる場合、学生の求める「2～3日に一度」の頻度で練習時間を確保できるよう自己学習日の設定をしていくことが求められると考える（図3）。

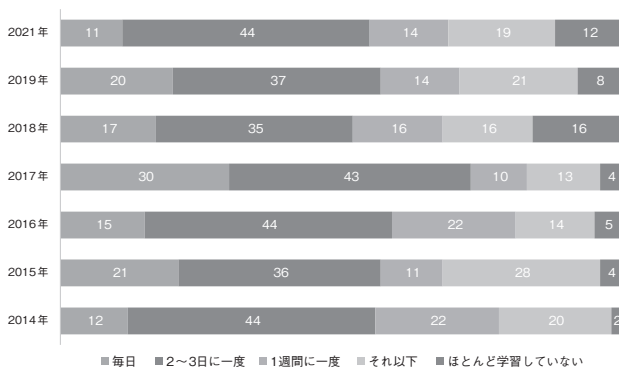


図3：実習室利用頻度に関する学生の回答（2014年～2021年）

3. 実習室の自己学習の満足度

概ね満足といえる「8～10」の回答割合について、2021年度は71.4%であり、2019年度は82.7%であったことから、11.3%の減少は見受けられたが、概ね現状維持できているのではないかと考える。

2021年度の満足度の減少理由に練習時間の制限が含まれることは確かである。しかしながら、学生の練習頻度は感染症拡大前と変化していないことから、今後に向けて練習時間を増やすことに重点を置くのではなく、学生の需要に応じた練習時間の確保が最も重要になるのではないかと考える。

4. 自己学習の満足度に対する自由記述

自己学習に対して満足できない理由には物品不足や練習時間の制限について回答が得られており、これらの回

答数は2019年度に比べ増加していることから、感染対策のための練習時間や人数の制限が学生の学習に影響を及ぼした可能性は高い。

物品不足についてはベッド不足に関する回答が全体の90%であったことから、人数制限を設けないフリーの自己学習日に利用者が多く、ベッドを確保できなかったことが予測される。この結果より、時間は制限されるもののフリーの自己学習日も時間制限を設け、学生が確実に練習できる環境作りに努める必要があると考える。

練習時間の不足については、学生の需要に応じて練習時間の拡大も検討していく必要がある。しかしながら、満足できたという回答の中には、「時間が決められているほうが集中できてよかった」という回答も見られていることから、練習時間の固定や制限が必ずしも学生の主体的学習を阻害しているとは言い切れない。学生が各自でスケジュールリングを行いながら、限られた時間の中で看護技術を獲得していくという環境も必要不可欠であり、そのバランスを見極めながら、学生により良い自己学習環境を提供していかなければならないと考える。

VII. 今後の課題

今後も感染対策を実施しながら実習室で自己学習を継続することが予測されるため、今回アンケートで得られた学生の回答をもとに、学生の主体的学習を支援できる環境作りに努めていく必要がある。制限のある中で、学生の満足度を高められるような環境づくりのため、今後も学生実習室委員会と連携し、学生の意見の尊重していきたい。

引用文献：

- 1) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（平成23年2月28日）[Internet]. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbiu.pdf> [参照 2021-09-29]
- 2) 伊藤綾子, 駿河絵理子, 藤井美和. 基礎看護技術の主体的な学習法に対する学生の反応—看護技術の演習方法の変化と技術習得過程における動機付けとの関連—. 東京医療保健大学紀要. 2008; 1: 29-35.
- 3) 荒木麻奈美, 佐居由美, 中田諭ほか. 看護実習室における実習室助手の支援の現状. 聖路加国際大学紀要. 2019; 6: 103-6.